

染香

ぜんこう

福泉寺寺報
令和3年6月
第95号
(毎月1日発行)

なぜだろう

家にいるのに

「帰りたい」

過ぎた女房だった

四月中頃、ご門徒さんがお浄土へ旅立ちました。浄土真宗では「往生の素懐をとげると言い習わします。往生とは、浄土へ「往」って、仏に「生」まれるという意味です。また「素懐」とは「平素から温めていた願い」という意味です。

ご門徒さんが平素からそのように願っていたかはわかりません。しかし、若い頃からご苦労も多く、またご当家に嫁いだ身として一生懸命に生きられたお婆、長らくご病気と付き合っていてこられたお婆から、今こそ多くの苦悩から解放されたのだと思わずにはおれませんでした。

七日勤めでのことです。ご主人が涙ぐんで「わしには過ぎた女房だった」と言われました。いい言葉です。私はすごし間をおいて「そのことを奥様にお伝えしましたか」と訊ねましたら「いや」とお答えなさいました。あとで振り返れば、我が身のことを棚上げして、意地悪な返しだったと反省したことです。

皆さんどうでしょう。

「自分には過ぎた奥さんである」

「自分には過ぎた夫である」

と思っていますか。お互いに元気だったら、過ぎたところではなく、不足ばかり目についてしまいます。このことは、子どもや親、職場など、すべての関係に当てはまることのように思えます。感謝しても所詮は「ギブアンドテイク」の世界のことです。



喪って知るのでですね。知ることができて、ご主人は幸せだと思いました。

私は、いま「自分に与えられている幸せ」に気づいていないのだと思いました。にもかかわらず、分かっているような顔をしているのではないか。そのことに気づこうとせず、一体何に励んでいるのか、そんなことを考えさせられました。

「わしには過ぎた女房だった」。長く耳の底に残しておきたい言葉です。

いかかでしょう。

(住職)

お経のことば折々



《諦(たい)》

この字は「あきらめる」と書くので、現在では「断念する」という意味で使われます。しかし、本来は「あきらかにする」という意味です。言い換えれば「気」がされる」とも読めそうです。親鸞聖人という人は、理性では自我をコントロールすることは出来ない(心)がけほどあてにならないものはない(こと)を、仏様の願いの内容を知ることを通して諦かにされた方でした。

ちょっと あたまの こりほぐし

切れないのこぎりを
使えば使うほど切れるものがあります。
さて、何でしょうか？

新聞の中に「答えの掲載」を求めるお声がありましたので…



おてらから

先月号より、皆さまの思いを掲載させて

いただきましたおもいます！

・本紙ワ3面の「お寺」欄です。

・このタイトルは『阿彌陀經』の言葉です。個々の価値観を尊重する、私の価値観を見つめ直す、そんな思いが込められてあります。(次号お願いますかも知れませんが…)

境内に休憩場所を設置しました

・テラスと呼ぶには取っかきしいですが、お「寺」で息を「スウ」として、仏様の「照らす」光を感じてみてください。くだされば何よりです。

お晨朝 (朝のおとめ)

毎朝6時半〜

読経の時間は十五分程度です。

手ぶらで、思いつきで、気楽に、仏様の前に座ってみるのもいいです。

母の『みやん』

渡辺恵子（85歳 主婦）

「良くやった。良くやった！」
幕が降りると舞台の袖で見守っていた先生が両手を広げ、私達を迎えてくれた。極度の緊張から解放された私達は、先生の腕の中になだれ込み感激の涙を流した。

忘れもしない終戦の翌年、当時小学五年生だった私が、学芸会の演劇に出演し、幕が降りた瞬間だった。

私の役柄は、裕福な家庭で我儘放題に育ったお嬢さん役で、衣装は「華やかな物」と、ト書きがされていた。

役柄について不安は無かったが、衣装のことが気になり先生に相談すると、「セーターやスカートで十分だから」と言われた。しかし、私には役柄に相応しい物は何も無かった。

衣装のことは母に相談する以外に方法はないが、家計のことを考えると直ぐに言い出すことが出来ず、友達は衣装自備をしながら役作りに取り組んでいる。流石の私も落ち着いていられなくなりました。

木枯らし吹く夜更けに、母が縫い物をしていました。私は思い切って衣装の「と」を切り出した。すると、母は待ちかねたように、

「何時になったら言い出すかと待っていたのよ。まあか、母さんに心配かけるだけでも思っていたんじゃないかな」

と図星を指された私は、黙って頷いた。

「余計な心配はいらないよ。台本を見た時から、母さんも衣装のことを考えていたの。だから心配しないで任せなさい」と胸を叩いた。

母は今まで一度も約束を破ったことのない人なので信じて待っていたが、学芸会間際になっても、約束の衣装は影も形も無い。どうしたのだろう。と不安は日ごと増大したが、私は母を信じ催促がましいことをしなかった。



「いに、学芸会の朝が来てしまった。

ため息まじりに起き上がった私は、机の上を見て、「あつ」と息をのんだ。そこには、夢でも見ているような、真っ赤なセーターと黒のスカートが並んでいる。

「母さん買って来てくれたの？」

私は大声で叫んだ。

「約束通り母さんの手作りよ！」

母は得意気に笑みを浮かべた。

「母さんの意地悪。どうして、今日まで黙っていたの？」心配で眠れなかったのだ。「早く着て！」と。まじと夜更けに思いついた。

母は私を急ぎ足で着替えるを手伝ってくれた。「お母さん、早く着て！」と。まじと夜更けに思いついた。母は私を急ぎ足で着替えるを手伝ってくれた。

「お母さん、早く着て！」と。まじと夜更けに思いついた。母は私を急ぎ足で着替えるを手伝ってくれた。

「それは、後のお楽しみ……」とはへらへらとした。

拍手喝采を受け大満足で帰宅すると、

「小学生とは思えない演技だったよ。それに赤いセーターが良く似合い、我が娘ながら惚れ惚れしたよ！」母は上機嫌であった。私も、先生や友達に褒められたことを報告したついでに、衣装のことを尋ねた。

「そうだったね。衣装の種類かしをしようね。セーターは母さんの、みやん。スカートは襟巻だったの」

「『みやん』って何なの？」と私は聞き返し

「『みやん』と言っているのは純毛のメリヤス編で作った都腹巻（みやん）（しまき）のこと」と何気なく言った。

「えくえ！」のセーター襟巻だったの？」

私は驚き、顔をしかめた。

「だから今まで隠していたの。でも、その襟巻きは新品だから！」と意味あり気に言えた。

問題の『みやん』は、母が嫁ぐ日に、祖母が持たせてくれた物だった。それ以来、『みやん』を母親の形見と思いついて仕舞い込んでいたが、学芸会の台本を読んだ瞬間、「今こそ、『みやん』の出番と思いつき、一気に仕上げた」と今までのいきまじを話した。

「『みやん』が大切な品だと知らず、我儘で御免なさい……」私はペコリと頭を下げた。

「『みやん』が役立つと本当に良かった……」

母は暗れやかな笑顔を返した。『みやん』と口の中で呟く。あの日の母の顔を思い出して

2020年 プロミスエッセー 入賞作品

みなさんのリレー講話 青色青光

『ご縁をいただきます』 石井雅弘

いつか出会う。でも今じゃない。大切なことを頭の片隅に閉じ込め、日々過ごす私。50歳の時、友の死を報せる涙の電話。「今日、主人が……」やると十数年後に私の心に変化が。気づくとも、捜そうともしていない、大切な忘れ物が多々あるのではない。そのひとつ。

仏法を学びたい思いが生じた頃、父の死がご縁を結んでくれ、お寺におじゃまさせてもらうことになりました。

同時に、行動基準を変えました。さらわれても、できうる限り「しょうがなかるうが」をやめて「それ、好きだな。面白いな」と思えるものをする。

善導大師曰く「人々はただ忙しく日を送り、気がつかぬ命が尽きてゆくことに……」のうのうと恐れおそえにさせず、こころせよ、身体が丈夫なときこそ、移ろわぬものを求めて努めるがいい。仏法面白いですよ。

とこころで、水戸黄門の主題歌、あれ、いいですよ。あそこから来たのに遠い越され泣くのが嫌ならさあ歩け。「そんなんわか」と思いついたが、長期入院生活。病室の天井を見ていた若い頃の不安な日々。そして今は、歌詞の最後「なんにもしないて生きるより、何かを求めて生きようよ」ということなんですよ。何れ物接し、間に合うことですよ。

仏法おもしろいですよ。

お堂のねずみ 今日元気です。